

ことを知つて退くことを知らぬ青年は矢鱈に使用したがるもので、失敗の時でも、失意の時でも、叱られた時でも、忍耐力の續かぬ時でも、殆んど口癖の様だ。今しも例の文句を捻りつゝ筆を投げ入れんとして、カバンの隔板を引き明けた。後の方で「駄目だ駄目だ」と言ふ聲がある。確かに覚えのある聲で、何でも鎌倉講習の際、江の島行の電車がこみあつたから一行の者我れ先にと争を始めた事があつた。するとおもむろに、「年の順か、身長の順か、色の黒い順か、此の三の中で選まう」と言はれた人があつた。今聞いた聲は此の人に其の儘であるから振り返りて見ると間違もなく大下先生である。不思議と言ふよりは寧ろ驚いた。あはてざまに筆を振つていきなり始めた。すると先生が怒るに教えて呉れる、「君の繪の色は乾燥する。此の水は何だかひび割れ相だ。畫面をこする形蹟が見える、どうも宜しくないと乾くからこんな癖は早く捨てよ。關西の男が繪筆を嘗める傾があつてよくない。多く自然を見て少く描け。時時眼を他に移せ、若しさうでない、最初の感じを最後迄持續する事が出来ない。全體を見て局部を見るな。光線の府を見附けぬから調子が整はぬ。小刀細工は調子に負傷させる。自然物には單純な色がない、松葉や草の緑は繪の具の緑其の儘で出ると思つたら間違だ。其處をごまかしたから自然の感じを夫つた。其處は講義録を暗記して居て色を使つたから自然物と違つた。自分の頭で色を製造してはならぬ。もつと忠實に寫せ。汗水で溶いた繪具

で描いた夏の景は活動して居る。氷を割つて描いた雪の景には生命がある。彌次られおほせば彌次られぬ畫が出来る。笑はれ盡せば笑はれぬ畫が出来る。失敗だと思つても中途で止めてはならぬ、最後迄やり通せ」と連發される詞に勵まされ、約三時間の後には大體纏りが着いた。調子の修正も出来た。尙ほ御指導のあることと思つて、待つて居たが何も無い。不思議なるかなと顧みれば、彌太君の一人も居ない。唯だ膚をつんざく烈風はなやみも無く襲來して居る。全身急に小振動を始めた。あゝ夢であつたかと思つて、つぶやきながら筆を投げ入れると、その底から手札形の紙に「日本水彩畫會々員」と記した守りが現れた。是れは去る鎌倉講習の際、要塞地帯内で若し咎めを受けた時辯解の證として貰つたのである。何も田舎の彌次を威す野心もないのだが、其の後先生の名代として箱を放した事がない。若し此の札に眼が觸れると、以前の如き感想がむら／＼と湧いて來て、ごまかすなどは絶對的に出来なくなるのは常である。あゝ畫に志のある輩は必ず一度は講習に行くべしだと思ひつゝ畫板を擔いで、歸る時の愉快さは、又格別のもので恐らく此の道樂を有たぬ人には解るまいと思ふ。

春光

畔

川

塔の影うら／＼と草つみにけり
十二橋水のまにまに草をつむ